

みどりの風

(URL) <http://www.ginzado.ne.jp/~k-iskwj/> (E-mail) k-iskwj@educet.plala.or.jp

セイタカアワダチソウの秘密

無事、創立 40 周年記念文化祭が終わりました。このたよりが届くころには創立 40 周年記念「校内音楽祭」が終わっています。子どもたちは心ひとつに合奏、歌やハーモニーづくりに取り組んでいました。

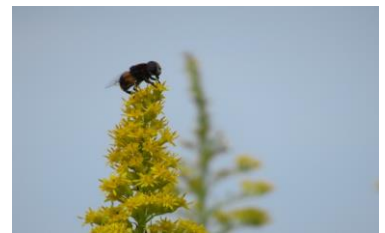
さて、私の恩師からいただいた資料（聞いた話）を紹介します。字数の関係で、山本が手直した部分もあります。ご了承ください。



秋の七草の一つに数えられるススキ。美しい穂をつけ、秋の深まりを告げるススキ。ススキには、強力なライバルがいた。セイタカアワダチソウ（セイタカアキノキリンソウ）である。今空き地では、ススキとセイタカアワダチソウの仁義なき勢力抗争が繰り広げられている。

この草は花粉症の原因にもなる“ブタクサ”とは別の植物。人間には害はない。これは北米原産の帰化植物で、本来は日本には自生していなかった。実際に目立つようになったのは戦後で、昭和 40 年代以降には全国で大繁殖。明治時代に園芸用として持ち込まれ、戦後アメリカ軍の輸入物資に付いていた種子によるものが拡大起因とされている。今ではよく日が当たる所、土手や湿地を好み、秋になるとこの植物をよく見かける。

驚くべき能力は生命力が強すぎる。1 本で 5 万個もの種をつける。しかも 1 m²に 100 本と言う大変な密度で生え、1 m²では実に 500 万個もの種をつける。これが 2～3 本生えたなあと思ったら、翌年には空き地のあちこちで群生がはじまり、数年後にはその空き地はすっかり占領されてしまう。この根には植物の発芽・成長を阻害する物質が含まれており、それを分泌することによって周囲の植物を攻撃する。毒素は、他の植物を枯らすだけでなく、土の中にあるモグラやミミズなど、土地を豊かにしてくれる動物や昆虫たちまでも駆逐してしまう。日本古来の草花たちは、みんなこれにヤラレ、生えなくなってしまう。野原一面にセイタカアワダチソウ。こんな風景を最近よく見かける。秋の七草の風情は見られない。今や日本の空き地という空き地がこの草に侵略されてしまった。日本の野原は完全にセイタカアワダチソウが牛耳り、勢力争いに完全勝利したように見えた…。



が、また勢力図が変わりつつある。ススキだって負けていられない。セイタカアワダチソウにも危機が…。自分の能力が強すぎて、自らを追い詰めてしまうこの草の姿があった。3～4 年で自滅することが多いらしいのだ。地表から 50 センチの深さのところから肥料を運び出してきては、大きく成長し、枯れてしまうということを繰り返すうちに 50 センチの深さの所にあった肥料を使い尽くしてしまう。地中に養分を運ぶモグラやネズミが駆除されてしまったことも、肥料不足を加速させた。そして、この草たちが、自らが分泌した毒素（アレロパシー）の影響で、自分自身まで被害を受けるようになった。

おかげで、一時はあれほどの興勢を誇ったセイタカアワダチソウが、最近では自滅をはじめたと言う。排他的であるがゆえに、一時的には興隆を誇っても、結局は自滅していく。そこに、ススキが反撃を開始したというわけである（なお、ススキの強さは外国でも知られているらしい。日本で一時セイタカアワダチソウが猛威をふるったように、ススキも北米で侵略的外来種として猛威をふるっている。立場が変わると…、皮肉なものである）。【P 4 に続く】